

埋文センターニュース

津市埋蔵文化財センター

第3号

1996.3.31



第15回三重県埋蔵文化財展 津リージョンプラザで開催される

津市と安芸郡内町村の考古資料を一堂に展示

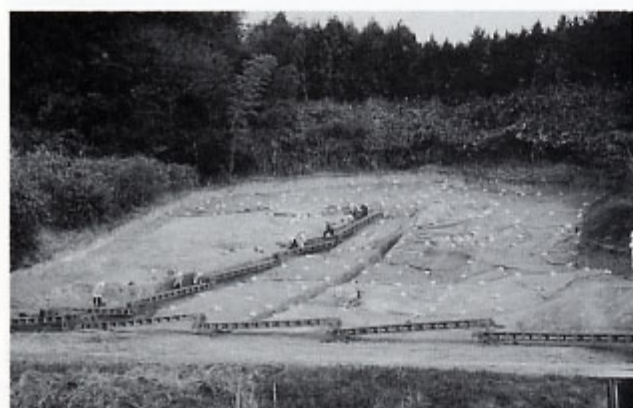
第15回三重県埋蔵文化財展が、津市役所隣の津リージョンプラザ3階生活情報センターを会場として、昨年9月30日～10月11日までの12日間にわたって開催されました。

今回の展覧会は、三重県埋蔵文化財センターと津市教育委員会の共催事業として行われたものです。津まつりとも重なった10日には520人余の見学者が訪れるなど、総計2,100名を超える入場者を記録し、市民の皆さんの文化財に対する関心の高さを示す結果となりました。

最近の発掘調査から 《^{さんのう}山王遺跡》

山王遺跡は、安芸郡河芸町南黒田の丘陵地に所在する遺跡です。平成6年夏に中勢北部サイエンスシティ第一期事業にともなう試掘調査を行ったところ、^{やまぢやわん}山茶碗などの遺物が出土したため本調査を行うことになりました。調査区は、日当たりの良い丘陵地の南斜面で、かつては畑として利用されていたところです。調査区の中央にトレンチを設定して土層断面を観察したところ、ここはもともと南向きの小さな谷で、そこに大量の土が堆積して現在のような斜面になったことがわかりました。堆積した土のなかには、古墳時代の土師器から鎌倉時代の山茶碗に至るまで、さまざまな遺物が含まれていました。

ところで、これらの遺物にまじって写真のような高杯が1点出土しています。これは庄内



調査風景

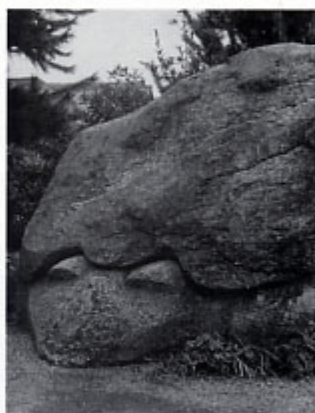


出土遺物 高杯

^{しょうない}式土器と呼ばれているもので、弥生時代末から古墳時代初頭（約1800年ほど前）に位置付けられている土器です。古墳の出現は、日本の歴史のなかの大きな画期のひとつですが、この高杯はまさにそういった時代に使われていたのです。この土器を弥生時代のものとする研究者と、古墳時代のものとする研究者がありますが、現在のところ結論は出ていません。さて、この庄内式土器は近畿地方を中心に、三重県の伊賀地域まで分布しています。ところが、伊勢湾沿岸では同じ頃に^{かけやましき}欠山式土器と呼ばれる違った形の土器が使われており、庄内式土器が発見されることはめったにありません。おそらく山王遺跡で発見されたこの高杯は、河芸町周辺でつくられたものではなく、もっと西の地域から運びこまれたものなのでしょう。 (村木)

平成7年度 埋蔵文化財発掘技術者専門研修「文化財写真課程」に参加して

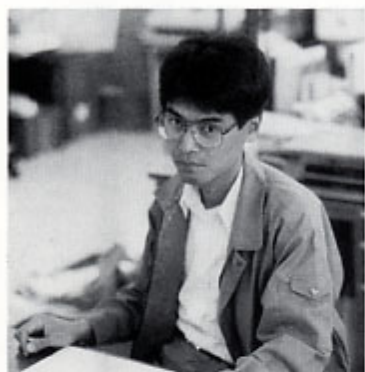
8月17日から9月13日まで、奈良国立文化財研究所で行われた文化財写真の研修に参加しました。これは奈文研が毎年行っている埋蔵文化財担当者のための専門研修のひとつで、約1ヵ月にわたる長期研修です。研修の内容は、前半が写真の原理・歴史から撮影の具体的なテクニックなどの講義、後半が自分で実際に撮影や暗室処理を行い、その写真を使って報告書の写真原稿を作成するというものです。講義内容があまりに専門的で、頭がつかない(?)とか、ハードな実習でフラフラになる場面も見られましたが、夜になると講師も研修生も一緒になって、ワイワイやりながら楽しい時を過ごしました。この写真はその実習で撮影したものです。



のどかに佇む飛鳥の亀石

私たちは日ごろ発掘作業に追まられるあまり、自分達が残してきた記録の質をチェックするというのを忘れがちです。この研修は、写真を通して発掘調査と記録の「質」について考えさせられるもので、自分自身の仕事をみつめ直すよい機会になりました。(山口)

こんな仕事をしています～業務内容紹介《その3》～



ようやく本調査が始まり毎日現場へ出ています。今回の現場は日当たりが良く風も当たらないところがあるので、冬の寒さもあまり苦になりません。(村木)



昨年12月に、何と2年ぶりに発掘現場に復帰しました。この2年間どうも体調が良くなかったのですが今は絶好調。やはり野生の動物は放し飼いが一番のようです。(山口)



今年は現場も少なく内業に励みましたが、刊行できた報告書は一冊。「今年こそ」とは思うのですが、積み残しの報告書と体重ばかりが増えていく今日この頃です。(中村)

遺跡紹介② 銅鐸の出土した集落遺跡《^{よつ}野B遺跡》

四ツ野B遺跡は、津市の南部を流れる雲出川の左岸の台地の端にある遺跡です。平成4年と5年に発掘調査が行われ、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての^{たてあな}堅穴住居が87棟も発見されました。発見された堅穴住居は複雑に重なりあっていますが、これは、同じ場所で何度も建て替えが行われたことを示しています。堅穴住居は一辺5～6mの方形のものが多く、



堅穴住居群

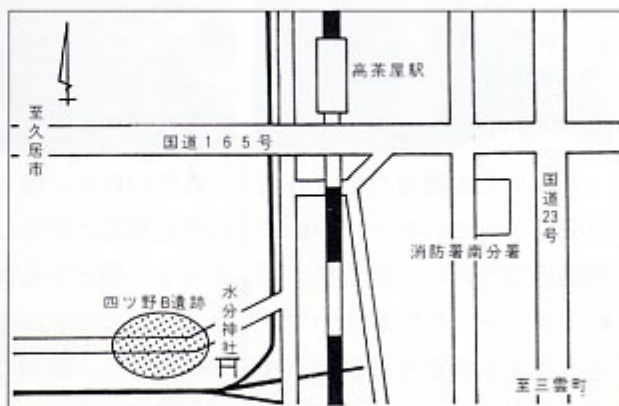
五角形のものも1棟だけ見つかっています。^{ほったて}掘立柱建物も数棟みつかっていますが、これらも堅穴住居と同時期のものと考えられます。平成4年に調査を行った地点のすぐ東側ではかつて^{たかぢや}銅鐸(高茶屋銅鐸)が発見されています。出土した時の状況はよくわかりませんが、どうやら複数の銅鐸が存在したようです。

銅鐸は弥生時代のもので、農耕祭祀に使用されたと考えられており、高茶屋銅鐸は後期の^{とつせんちゆう}突線鈕式と呼ばれるものに属します。銅鐸は、人里離れた山頂や山腹に^{まいのう}埋納され、偶然発見されることが多いものとされてきましたが、四ツ野B遺跡のように堅穴住居のすぐそばで発見された例は非常に少なく、銅鐸のまつりを考えるうえで注目されています。

(村木)



高茶屋銅鐸



四ツ野B遺跡の位置

遺物紹介② 副葬品に刻まれた文様 《メクサ4号墳出土鹿角装刀子と直弧文》 ろっかくそうとうす ちよっこもん

メクサ4号墳は、津市・安濃町・美里村の境をなす長谷山の東麓の低丘陵上にあるメクサ古墳群のうちの1基です。周辺には古墳時代の遺跡はもちろん弥生時代の遺跡も見つかっており、この地域が古くから人々の生活の舞台になっていたことがわかります。メクサ古墳群では9基の古墳が確認されていますが、墳形はすべて方墳とみられ、円墳が多い一般的状況とは異なっています。4号墳は昭和45年に発掘調査され、並んだ2つの木棺直葬^{もっかんじきそう}の主体部から須恵器・鉄刀・鉄鏃・刀子などが出土しました。

今回紹介する「鹿角装刀子」(写真左)は、その時に出土したものです。この鹿角製の柄には「直弧文」と呼ばれる、直線と曲線をミックスした不思議な図柄が彫られています。直弧文は鹿角装刀剣類に多くみられるほか、木製刀装具・鏡・石棺・埴輪などにみられ、その分布は全国的です。しかもその文様構成には厳密な規格性と共通性が認められることから、直弧文の製作・使用は特別な意味をもっていたと考えられます。また、これら各種の資料に施された直弧文には、立体的・写実的なものから平面的・抽象的なものまで様々な階段・種類のものがあり、形式的な変遷を辿ることができます。

右の写真は、津市大里窪田町^{ろくだい}の六大A遺跡^{つかがしろ}で出土した柄頭で、立体的な直弧文の彫刻が柄頭を取り囲んでいます。表面には黒漆が塗られ、文様は朱色に縁取られており、祭祀や儀礼に用いた特別な道具であることがわかります。この例からもわかるように、直弧文は本来帯状のものを刀剣などに巻きつけた様子を図案化したものと思われます。初めは主として刀剣類に用いられたのかも知れません。しかし、やがて文様自体に特別な力を認めるようになり、様々な儀礼に関わる品に施される過程で徐々に簡略化されたものと思われます。(山口)



メクサ4号墳出土鹿角装刀子の直弧文



六大A遺跡出土漆塗柄頭の直弧文
(三重県埋蔵文化財センター所蔵資料)

埋文センターこの一年

暑かった夏、そして寒かった冬。今年は例年になく、季節の移り変りを直接肌で感じた一年でした。また、昨年までに比べると開発に伴う発掘調査自体も少なく、このあたりにも不況の影響が及んでいるのかもしれませんが。

さて、津市埋蔵文化財センターがオープンして約1年半、今年度もいくつかの事業がありました。発掘調査では中勢北部サイエンスシティ計画に伴う山王遺跡の調査、試掘調査では高野尾里地区ほ場整備地域と専修寺庭園隣接地の調査が行われました。また、普及啓蒙活動



埋文センター見学風景

として秋には、市教委・県埋文センター共催で埋蔵文化財展が津リージョンプラザで開かれ、市内外から多くの見学者が訪れました。さらに、埋文センターの見学者もオープン以来すでに700名余を数え、春の遠足シーズンや秋の公民館主催の郷土教室等での来館が相次いでいます。来館者には簡単な展示と併せ、発掘・整理作業の説明も行っています。

センター日誌抄

- 平成7年 8月2日 津市監査委員3名 視察
10月19日 上田市教育委員会1名 視察
10月23日 奈良国立文化財研究所深澤芳樹氏 長遺跡出土遺物実見
11月15日 中央公民館「郷土教室」37名 見学
12月5日 北立誠小学校・幼稚園「家庭教育学級」20名 見学

《編集後記》 徐々に日差しも暖くなり、ようやく埋文センターの一年のサイクルが終了しようとしています。しかし、発掘調査→整理→報告→管理保管という流れは絶えることはありません。来年度はこれらに加えて年報の作成もあります。もうすぐ桜の季節、でも浮かれてばかりはいられません。 〈中〉

発行：1996. 3. 31
編集：津市教育委員会
津市埋蔵文化財センター
〒514 三重県津市安東町1225
TEL 0592 - 29 - 0210
FAX 0592 - 29 - 4601
印刷 森田印刷株式会社